

第二百九十一回 青葉会

平成二十二年六月二十四日(木) 午後六時〜九時  
丸紅一階レストラン「談話室」

〈選者〉 ☆ 川合万里子 先生

〈出席者〉 石川清 今井紀久男 大林猛 小川恭延 柿崎忠彦 川口孤舟 豊田ゆたか 橋口隆

山内天牛

伊賀山そらお 小西弘子 朱牟田恵洲 土谷堂哉 福島正明 宮内規雄 南平和夫

山崎垂也 山本三恵 渡邊盛雄

赤田堅 庄司龍平 高梨由美子 高橋敏郎 早川允章 福島正明 村田くに子

山崎青史(陽亮改め)

ゴシックは選者の天

羊らの語らひ頻り緑雨去り

万里子 (ゆ・正)

(六甲山)

辛勝と惜敗応援明易し

全

鱒刺の行手をめがけ川下り

全

どくだみを五百本抜き一番星

全

原詩読む辞書を引きづめ入梅雨(ついでりあめ)

全

《互選句》

六点 ☆ 峰みねに雲噴き出でて梅雨来る

そらお (万・堅・清・由・敏・ゆ)

里山の流れに鮎の影走る

全

土佐なまり似合ふ男と鯉食ふ

忠彦 (堅・紀・猛・由・敏・允)

五点 ☆ 夕暮に子を待つ母や立葵

全

☆ 明易し酸素マスクの中の朝

弘子 (万・紀・恭・忠・天)

(万・朝↓母)

東吉野吟行

隠(こもり)り国(くに)の棚田百枚山清水

盛雄 (孤・ゆ・允・く・青)

(青: 山間の棚田。そこに注ぐ透明な清水。きれいな描写)

四点 山宿の朝備長(びんちょう)の火の涼し

孤舟 (紀・由・ゆ・青)

(青: 今は珍しくなった手を翳している様が見える。火が涼しい、とは快川和尚ですね)

あぢさゐの毬より侏儒の鼓笛隊

全 (恭・ゆ・隆・青)

(青: 豊かな想像力。童子の感性を持ち続けているのが羨ましい)

紫陽草(あぢさゐ)や人の心を読み切れず

隆 (堅・孤・允・天)

麦秋や少年の日の登校路

規雄 (恭・由・敏・天)

海老蔵の暖簾を揺らす青嵐

紀久男 (恭・允・天)

孫去んで閑けさ戻る梅雨入かな

全 (龍・く・天)

夏日蔭出土の破片磨く人

恭延 (忠・敏・ゆ)

☆ 主の顔知らねど紫陽花顔見知り

忠彦 (万・猛・龍)

心配を隠す蔭なき夏至となり

弘子 (清・忠・隆)

古希にしてなほ惑ふかな梅雨深く

恵洲 (紀・允・正)

(正・古希にして猶読み切れぬ梅雨の底)では?)

蛞蝓(なめくじ)や文字のみ残こし消えにけり

隆 (紀・忠・敏)

各論がどうも苦手な青みどろ

正明 (紀・孤・青)

(青: 青みどろのどろっとした感じが如何にも各論苦手と思わせる)

人波に老足遅し梅雨晴間

恭延 (紀・正)

二点

☆ 白百合と会釈交して外出す

全 (万・猛)

(正・中七↓「足の老い知る」では?)

☆内視鏡結果知る夜の冷酒かな

(正・・・↓「検査後の冷酒ピッチ上がらずに」では?)

忠彦 (万・正)

深林の星空揺らし仏法僧

孤舟 (清・猛)

色白き片肌の射手梅雨晴れ間

惠洲 (龍・く)

☆スコールや往時のアパルト何方(いずかた)へ

堂哉 (万・恭)

☆白夜の街闊歩する妻古稀にして

(☆↓古稀の妻白夜の街闊歩する)

ゆたか (万・隆)

コッウォルズにて

☆麦秋の千古の村のパブに酌む

(☆・・・「の」多いと間伸びする↓麦秋や)

全 (万・紀)

星占ひ喉に刺さりし鮎の骨

隆 (青・天)

☆父の日を忘れて遺影に畏まる

(青：今日は鮎を食うといいことがある、とでも占われたか。占いは信ぜぬこと)

三恵 (万・隆)

笑ひ声絶へぬ酒場に額の花

清 (く)

小守宮(こやもり)を抑へて踊る大守宮

全 (隆)

(窓ガラス上の縄張り)

一点

「鳴神」

☆振袖に清水掬ひて口移し

紀久男 (万)

をちこちに夏雉子わめく田の日の出

全 (龍)

ノレソレが喉をくすぐり酒ねだる

猛 (紀)

紫陽花や周囲の闇と共に揺れ

恭延 (猛)

☆梅雨空を眺め終着駅に到(き)く

全 (万)

はんざきの疑ひ深き眼かな

孤舟 (忠)

紫陽花のどこか濡れるる月夜かな

全 (龍)

搦手から攻めて落城かき氷

正明 (青)

(青：かき氷の食べ方は難しい。下手すると器から溢れる。作者はそれを知っていて、横から攻めている。楽しい句)

シンガポール再訪

夏空を埋め尽くさんか摩天樓

堂哉 (孤)

新緑や笑顔で譲り合ひ田舎道

和夫 (堅)

梅雨入りや二人でカート押す相合傘

全 (正)

(正・・・↓「梅雨最中相合傘がカート押す」では?)

敗戦後あの夏休み麩(ふすま)食ふ

規雄 (忠)

出藍のゆくへ迷ひて額の花

亜也 (正)

(正・・・↓「出藍の誉は何処へ七変化」では?)

南洋は楽土たり得で仏桑花

全 (紀)

梔子(くちなし)の肌膚(はだか)なまめく夜の雨

全 (龍)

麩饅頭竹の若葉に包まるる

天牛 (く)

西日除け苦瓜の苗つるのばす

全 (清)

ジメジメを「みずほの国」と諦めり

三恵 (ゆ)

(青：下五は文法的に間違ひ。↓諦めぬ)

西行も聴きし山田の夏うぐいす

盛雄 (孤)

●次回青葉会

七月二十二日(木) 午後六時〜九時 (丸紅・談話室)

八月二十六日(木) 25周年記念 全 (全)

▲当季雑詠各自五句。投句は二句

以上文責

紀久男

第二百九十一回青葉会後記（平成二十二年六月）

一、今回は万里子先生以下10名出席。投句10名。猛さんの披講及び合評の進行役で御覧のようにそらおさん、忠彦さんが高得点でした。先生お手製のナスタチウムとチヂミをつまみに、忠彦さんから「太平山・天巧」純米大吟醸（秋田）、小生の「三重大学」純米吟醸と純米大吟醸（学生が田植えから酒造まで手伝い）を賞味し乍ら、いつもの調子で呑み食いました。

当日の話題

(一) 久しぶり出席の孤舟さんから急逝した小澤克巳主宰のこと（胃癌で余命二三日。周囲に知らせず、「遠嶺」廃刊の遺言）追悼文を「俳壇」に寄稿された由  
(二) この八月に当会創立25周年。記念行事は企画しておりませんが、8月26日（木）句会に旧メンバー各位に御来駕下さるよう、共に祝杯を挙げたい旨のお声を掛ける予定  
(三) 塩見勝さんの大著「継体新王朝物語」（私家本、6月18日発行）  
(四) 正明さんの投書（毎日新聞6月9日「みんなの広場」）等々  
句会始まる前に三恵さん来室され不況の派遣業界のことや、投句された自作の「ジメジメ」は語感分るが季語にならないこと等暫時の会話

二、関係者近詠

其処此処に日本たんぼぼ子の母校	万里子	露草の色のあざやか辻地蔵	くに子
轉りやルビいつぱいの旧寮歌	全	果せない約束もあり虹の橋	正明
飛花しきり入部誘ふ立看板	全	忽然と湖開けたり時鳥	允章
アニメ部の達者なポスター入学期	全	碁敵にふられし無聊走り梅雨	全
桜活け石人佇む民芸館	全	生まれ出で蠅螂の斧すでに斧	青史
朝鮮の漬物壺を蝶巡り	全	虚子句集神田古書街紙魚走る	全
花明り李期白磁のふくらかに	全	鯁買って陸橋わたりゆく男	全
春光や飛ぶもの踏ぶものみな追ふ児	眞希子	春蟬に競い合いたる滝しぶき	猛
新聞をせはしく繰りて四月馬鹿	全	風薫る楽屋に初の若女将	紀久男
葉桜や幼馴染に種痘あと	忠彦	紫の櫓くつきり五月晴	全
春祭裳裾飛鳥に翻る	恭延	うちかけ したた まぶ	
団子虫草引かれてもなほ丸く	和夫	裨褙に水滴らせ問夫かばふ	全
露天湯の風やはらかし山の藤	弘子	先達の法螺貝寒の木霊道	孤舟
すつぽんの首長くして春の水	全	凍滝の心音を聴く真澄空	全
春惜しむ歌舞伎座最後の出番かな	紀久男	むささびの飛び深更の闇揺らす	全
夜桜や稽古に駄目押す團十郎	全	一穢なき春雪われに恥多し	全

『萬緑』7月号

『遠嶺』5月号

うぶな同士の幼い恋の望み叶った夫婦箸

恵洲

〔NHKラジオ折込都々逸「う・お・の・め」〕

平成二十二年七月九日

紀久男記